

この国はどこへ行こうとしているのか (7) 赤川次郎さん

赤川さんは、人気を得てもインタビューや講演で政治的な発言はしないようにしていた。なぜなのか。「作家の本分は、作品で自分の思いを表現すること。作品で自由の大切さを伝えたり、何かの判断材料を提供したりはしますが、政治的な発言をするのは控えるべきだと考えていました」。

でも一。日本の行く末を想像すると「発言しないわけにはいかない」と思い始めた。きっかけは99年の国旗・国歌法の成立。「国旗や国歌に抵抗を感じる人もいるのに、教育現場などでは次第に強制されていくかもしれない。国民の自由が脅かされる社会への第一歩になるのではないかと危機感を抱いた。それから徐々に時事的な問題に発言するようになった。作品としては、徴兵制に反対する大学教授が戦時中にタイムスリップする「悪夢の果て」を2003年に発表。04年には反政府的言動で国を追われた人気作家を描いた「さすらい」を出し、独裁化や軍国主義化への警鐘を鳴らした。昨年は解釈改憲を許さない文化人から成る「戦争をさせない1000人委員会」の呼びかけ人になった。

だが、時代は確実に悪い方向に進んでいると感じる。特定秘密保護法に続き、衆院平和安全法制特別委員会での安保法案の強行裁決がその証左だ。「これほど国会を軽視する首相はいなかった。首相も国民の税金で養われている公僕で、主権者は国民です。その意識が全く感じられません」。権力者の横暴が目には余ると批判する。

安倍首相は「日本が戦争に巻き込まれることは絶対ない」と繰り返す。これに対し、戦争の可能性を危惧している人は多いが、希代のストーリーテラーの認識ははるかに厳しい。「平和とは、ただ単に戦闘行為が起きていない状態を指すのではない。個人が自由にものが言える、どんな表現もできることが保障されている状態だと思います。ナチス・ドイツが政権を握っていた時も戦闘行為はない時期がありましたが、言論弾圧やユダヤ人迫害は行われており、平和だったとはとても言えません」安保法案を強引に成立させようとする手法に与党内から異論はほとんど聞かれない。それどころか反対する国民が多いのに、安倍首相は「決めるべき時は決める」と異論を封じ込めるかのような姿勢を改めない。「この状況が本当に平和だと断言できますか？」

「スローガンのように『安保法案反対』と叫ぶだけではなく、静かに怒りを持続させることです。たとえ成立しても、政権交代によって法律を変えることができます。『今の生活に影響がなければ別にいいじゃないか』と深く考えないのが最も怖い。どれだけ



あかがわ・じろう 1948年福岡生まれ、78年「旗幟列車」でオール読物集
短編集新人賞を受賞し、デビュー。2006年、日本ミステリー文学大賞が贈
られた。近著にエッセー集『三毛猫ホームズの帰国編』。一橋大学名誉教授

自分の問題として捉えられるか。そう考えてもらえる材料を提示するために僕は頑張ります。だって作家はペンと原稿用紙さえあれば、自由にメッセージを発信できるのですから」

(2015,年8月9日)